



井上安治の錦絵『銀座商店夜景』(1882・明治15年)。井上は第1回に登場した浮世絵師・小林清親の弟子。ガス灯に照らし出された店内には、当時まだ珍しかった缶詰が並んでいる。

ガスと暮らしのモノがたり ◆ 第2回 ◆

明治② ガスと電気の ライバル物語



マンテル灯の明るさは、裸火ガス灯の約5倍。炎は白く輝く。

文明開化のシンボルとなったガス灯は、街角から室内にも普及していきます。上の錦絵は、銀座にあった商店の夜の様子。明るく照らし出された店内にはたくさんの商品が積まれ、手前では商談中でしょうか？洋装の紳士を含む3人が語り合っています。左端には物珍しそうに店内を振り返る男性の姿も。彼の目には今まで見たことのない明るい室内が、まぶしく映ったのかもしれない。ガス灯は夜のショッピングという、新しいライフスタイルも生み出したのです。

それまでのロウソクやオイルランプに対して、燃料切れになつて消えることがないという利便性からもガス灯は歓迎されます。次々に誕生した洋風建築にも採用され、インテリアに

合わせてデザインに趣向を凝らしたするなど、装飾的に進化したガス灯が次々に生み出されます。

しかし明治20年代に入ると、強力なライバルが出現。白熱電球です。ヨーロッパで開発が始まり、トーマス・エジソンが実用化を推し進め、世界から夜をなくしたと賞賛されたまったく新しい照明です。

東京でも電気事業が始まり、当時の東京府はガス灯を電灯へ置き換えようとしています。そこで光力試験を行ったものの結論が出ず、ガス灯の存続が決定しました。ガス事業の黎明期に早くもエネルギー間の競争があったのは、興味深いことです。

そして明治30年代に登場したマンテルによって、ガス灯は再び隆盛の時代を迎えます。オーストリアの化学者・カール・ヴェルスバッハが発明したマンテルは、綿糸や人造絹糸（現在のレーヨン）の袋に発光剤のトリウムやセリウムを染み込ませたもの。これを裸火にかぶせることで、それまでのガス

灯の約5倍も明るく安定した光が得られるようになりました。マンテルの出現は日本のガス事業を加速させ、明治末期までに全国各地に事業者が誕生。ガス事業はブームとなり、ガス灯が津々浦々へと広がります。

一方の白熱電球も進化を遂げます。それまで竹などから作ったカーボン（炭素）を使用していたフィラメント（発光部分）が、熱に強く耐久性に優れた金属材料であるタングステンに置き換えられます。アメリカで誕生し瞬く間に世界に普及したタングステン球は、LED球が普及する現在まで実に1世紀以上にわたって家庭用照明の主役を担いました。日本でも照明は電気の時代となり、ガス事業は新たなフィールドへと向かうのでした。



鹿鳴館で使われていた室内ガス灯。